

(4)六ツ美地区内の祭り

肥沃な耕地と灌漑技術の発展などを背景に、農耕地帯として栄えた六ツ美地区では、農耕に関する祭礼行事や稲作儀礼が発達した。現在も残る六ツ美地区内の主な祭りとして、御田おた扇おうぎまつ祭り、六ツ美悠紀斎田(中島町)、チャラボコ太鼓(中之郷町)、七夕まつり(上三ツ木町)、ちりから囃子(下青野町)がある。

(5)御田扇祭り

①御田扇祭りの歴史

御田扇祭りは、正式には「皇大神宮御田扇祭」といい、地元の人々からは「おうぎさん」「たおうぎまつり」と親しみを込めて呼ばれている。

御田扇祭りは、近世岡崎藩の農民支配制度である手永制度¹のもと、藩領である手永内で行われた五穀豊穰を祈る祭りである。史料によれば宝暦6年(1756)にはその存在が認められるが、当時は手永から手永へと御田扇が巡行する形態であった。明和6年(1769)に本多忠肅ただとしが藩主となると手永は6つに区分される。本多氏時代には大庄屋の居村を発着地として各手永内において巡村が完結する形をとっていた。各手永内での巡行は旧暦6月に20日間前後かけて行われていたことが史料からわかる。

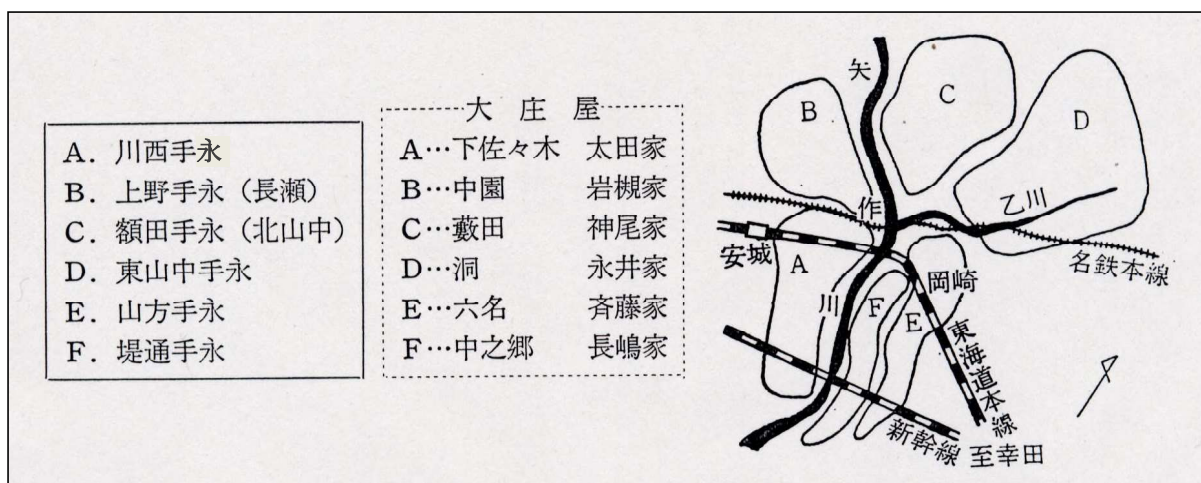


図2-6-3 六手永範囲と大庄屋

後本多家藩主時代には、御田扇祭りの開始(出発)時期の指示が岡崎藩から出され、6手永で一斉に開始されている。また、文化14年(1817)に伊勢神宮祓札の受取を大庄屋に命じる史料があり、天明元年(1781)に岡崎藩が伊勢御師の山本大夫と春木大夫の両人に扶助し、家中扱いとしている事実を勘案すると、御田扇祭りと伊勢信仰が藩主導の下に結び付けられたも

¹ 手永制度は大庄屋制度ともいわれ、水野忠善が岡崎藩主に就任した正保2年(1645)に成立したとされる。寛文4年(1664)時点で9手永に区分され、それぞれに大庄屋が置かれていた。大庄屋に各手永内の村々を支配させた制度であり、全国的にも導入した藩は希少である。

のと想定される。

実際に額田手永の神輿の中から春木大夫銘の大麻が発見され、伊勢信仰と御田扇祭りとの関わりを示す資料として注目される。神輿内には現在、伊勢神宮外宮の豊受大神宮の御神札が納められているが、かつて額田手永や山方手永では扇が、川西手永では扇と鍬形が納められていたことが確認されている。



図2-6-4 額田手永の扇

このように、御田扇祭りは岡崎藩の農民支配制度の中で、虫送りや伊勢御師の廻壇配札行為と結びつき行われてきた民俗行事と考えられる。岡崎藩の施策と密接に関わる御田扇祭りの存在は歴史的にも重要であり、他に類をみない民俗行事である点も大きな特色である。



図2-6-5 額田手永の大麻(春木大夫銘)

②現在の御田扇祭り

かつては岡崎藩の6手永全てで行われていたが、現在も神輿渡御を継承しているのは堤通手永、山方手永の2手永のみである。堤通手永は20町(うち4町は西尾市)、山方手永は13町(うち1町は額田郡幸田町)で構成している。

後本多家藩主時代には旧暦6月に約20日前後かけて手永内の村々を神輿巡行していたが、明治時代になってからは、1年に1町ずつ神輿を渡御行列により巡行する形態へと変化し現在にいたる。堤通・山方手永とも田植えが終わった7月に1日かけてマチからマチへと移動する。

表2-6-1 御田扇祭り関係神社一覧

堤通手永			山方手永		
1	中之郷	中之郷神社	1	井内	八幡宮
2	上青野	榊宮神明宮	2	下和田	犬尾神社
3	高橋	神明社	3	国正	稲荷社
4	上合欽木	神明社	4	正名	占部川神社
5	下合欽木	神明社	5	永野	永野神社
6	高落	神明社	6	定国	素盞鳴神社
7	新村	神明社	7	中村	占部天神社
8	西浅井	白山神社	8	坂左右	神明社
9	東浅井	社宮司社	9	野畑	鍬神社
10	安藤	鍬神社	10	若松	春日神社
11	福桶	三宮神社	11	針崎	御鍬神社
12	下三ツ木	三社神明社	12	柱	綿積神社
13	上三ツ木	神明社	13	羽根	稲荷神社
14	下青野	榊宮神明社			
15	在家	神明社			
16	土井	社宮司社			
17	牧御堂	薬師堂			
18	法性寺	五社神明宮			
19	宮地町	犬頭神社			
20	赤渋	御鍬神社			

③堤通手永御田扇祭りの一例

御田扇祭りの行列の出発・到着は各町の神社となる。堤通手永を構成する1町である宮地町には御田扇祭りの起点となる神社として、上和田城主宇都宮泰藤²が貞和2年(1346)に犬のおかげで災難を逃れ、その犬の頭を祀ったという伝承のある犬頭神社がある。本殿は明治22年(1889)に、拝殿は明治34年(1901)に再建された神社である。

現在、祭りは7月20日前後の日曜日に行われている。神輿などを送る側の町の神社で神事を執り行うことから始まり、その後渡御行列が出発する。各町の女性部や子ども会も参加し、町の規模によっても異なるが、行列は300人を超えることもある。行列の最中には藩、町、人が繁栄するように願う祝歌が歌われる。青々とした稲の繁る田園地帯を幟や紅白の扇、花傘を持った人々が練り歩く様には、その年の豊作を願う人々の思いが表れている。送る側と迎える側の町境で受け渡し式を行い、行列は迎える側の町の神社へ向けて出発し、到着後に神事が行われる。地元の小中学生による浦安の舞、女性たちによる奉納踊りなどが奉納され、祭りは神社内でも大きな賑わいをみせる。

手永内の順村は、旧暦の6月に約20日間前後で一巡するものであった。この形式は江戸時代末期まで続き、明治時代に入って手永制度が終焉を告げても、祭りは6手永の中で存続していた。時代の流れに合わせて、次第に形態を変えてはいるが、先のとおり現在は2手永において存続している。

山並みを背景に、地形に起伏のない田園地帯に大屋根の社寺とその社叢が点在し、またそれら社寺を中心に集落が形成され、それを街道が結ぶ。五穀豊穰を願い、青々と広がる田園地帯の町から町へと神輿を中心とした渡御行列が巡行する姿は、岡崎市独特の歴史的風致となっている。



図2-6-6 犬頭神社



図2-6-7 堤通手永御田扇祭りの渡御行列風景
(平成24年(2012) 中之郷町から上青野町)

² 宇都宮泰藤(1302~1352年)は下野国宇都宮氏の末裔で、三河大久保氏の始祖とされる人物。南北朝時代に碧海郡上和田の妙国寺前に移り住んだ。孫泰道は宇津氏と改姓し、さらに泰道の5代孫の忠俊・忠員兄弟の時に大久保氏となったといわれる。

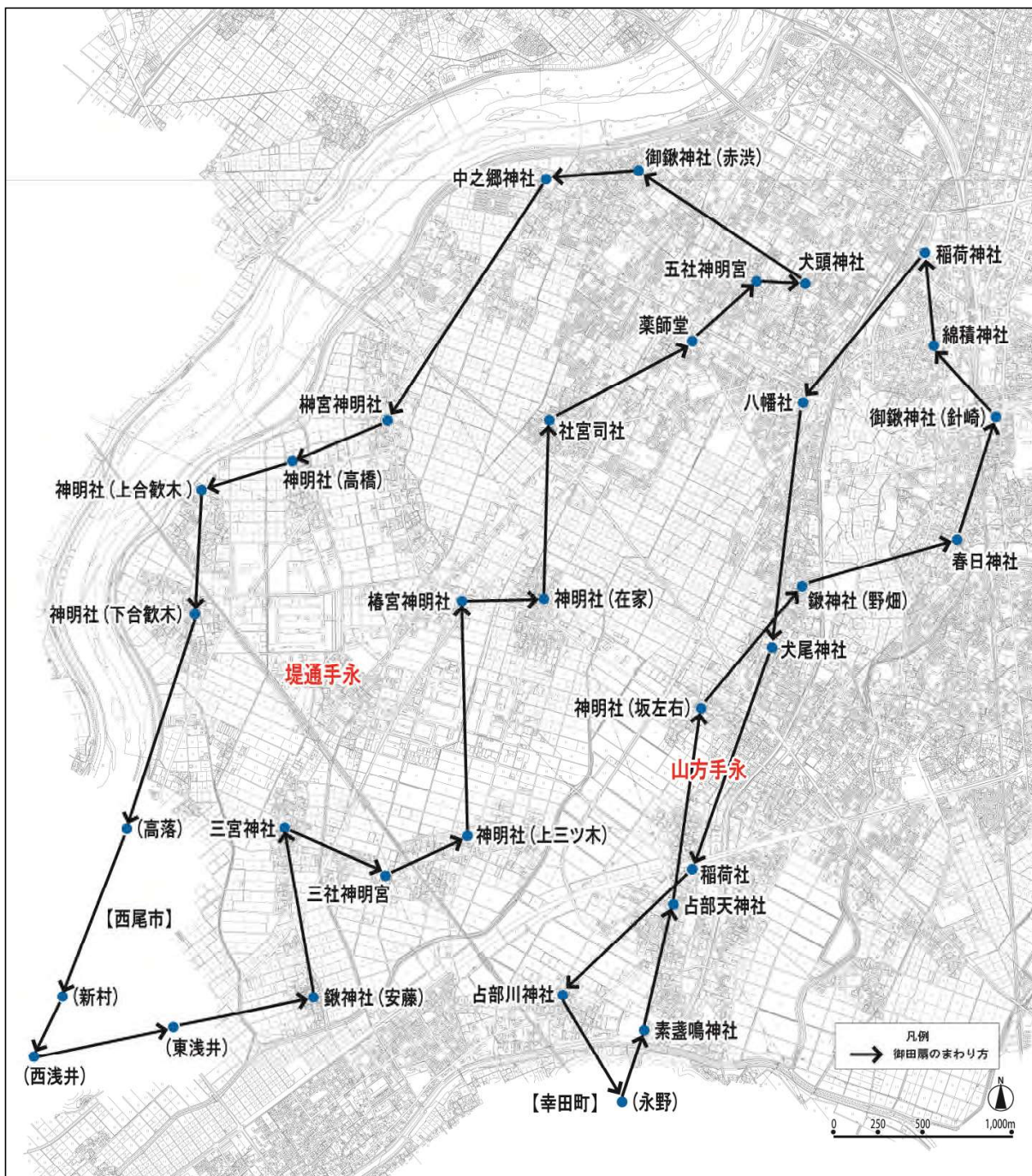


図2-6-8 御田扇祭りの巡回ルート(堤通手永・山方手永)